

# 象徴の形姿 (四)

——『哀歌』解釈によせるモノグラフィ——

岸 田 晩 節

世紀末から両世界大戦の中間期をへて今日にいたるまで、現代の詩人たちはみなそれぞれの仕方、何等かの意味において、あ・た・ら・し・い・現・実をもとめてきたといつてよい。精神に対する時代の叛逆にたじろぎ、よろめきながらも、懸命に立直り、あらゆる可能性の彼方にただひとつの現実をみつめて、あ・た・ら・し・い、そしても・は・や・永・遠にうちこはされることのないリアリズムの確立を祈念した。しかしそれはいまだ来らざる未・来の現・実といふ意味において、どこまでも可能性の地盤に立たしめられる、史上その類例を見ない試煉を経験したのである。古典派、浪漫派の思想的背景たりし観念論的反動を遂に脱却するものでなかつた詩的写実主義の旧套をあきたらずとして、これにとつてかはつたのが自然主義であつたが、世紀の勝利に輝く理念たりしその実・証・主・義・その社・会・主・義にもかかはらず、可能性の歴史の俎上にあつては却つて、それと相並びあるひはそれにくれて擡頭してきた印象主義と象徴主義とによる審・美・的・革・命を蒙らねばならなかつたのであり、両大戦中間期におけるダダイズム・表現主義・超現実主義を経て戦後における実存主義の今日にいたるまで、なほこの文学革命の歴史的意義は失はれてをらぬ。むしろこの革命の精神はキェルケゴールの源泉にその生命を掬しつつ原動力となつてあらゆる精神文化の分野に浸透し、もろもろの主義・主張を統べ束ねて、明日の未来にそそがうとしてゐるのである。すなはち今日の現代人の意識には、率直にいつて、「リアル」といふ言葉がもはや「リ



「アール」なものを意味しなくなつてゐる。素朴な、端的な現実を意味しなくなつてゐる。現実・はもはや可能性においてある現実なのであり、現実・は可能性を抜きにしては考へられない、むしろ現実・は可能性に纏綿せられ、可能性のなかから、可能性を克服してのみ、到達せられうるもの、すなはち、可能性の彼方に運命の彼方に絶えず克服せられねばならぬものである。しかし可能性がもはや脱却することのできない運命であるとするならば、そのやうな可能性を、そのやうな運命をわれわれはどうして克服し、どうして超えることができるであらうか。ここに文学ばかりでなく、むしろ哲学と神学における審美主義ないしは審美的人間の問題があつたのである。

すなはち、審美的人間は享受の瞬間において完全なのである。他の人間が全生涯の努力を傾けてもなほ達しえないものを審美的人間は一瞬にして獲得する。脳裏をかすめる一片の思想、半言雙句、洒落の一言もつて完全に征服してしまふのである。審美的人間は瞬間から瞬間へと、完璧の美の追求のなかに生き、あたかも永遠の存在であるかのやうである。善と悪と、かならず二つながらを併せ享受するゆゑに、二者択一の決意にせまられる他のいかなる人間にも卓越するもののごとくである。いかなるものにせよ、すでに対象そのものに常に人間をおびやかす危険がひそむといはれるのであるが、審美的人間はこの危険を知らぬ。審美的人間にとつてはおよそいかなる対象も存在せぬのである。審美的人間はすべてを享受し、すべてのうちに自分自身をしか享受しないのだから。審美的人間が瞬間において自己を主張しようとするならば、審美的人間は神にもふさはしいといふべきであらう。しかし審美的人間の危険は次の瞬間にある。といふよりもむしろ、二つの瞬間のあひだにある。かれの危険は瞬間のあひだを距てる虚無である。幾度となく、審美的人間はたえず自己の虚無を突破して超えてゆかねばならない、しかもこれに手をかしてくる者は誰ひとりありえぬ。次の瞬間を獲得することが彼にとつてますます困難になり、遂に力尽きはてて、審美的人間は自己みづからに、みづからの虚無に、絶望に溺れるのである。これまでつかんであると思つてゐた多くの物たちは審美的人間に向つて立ちなほり、デスマスクのやうに、ちつと見つめる。もうかうなれば、物たちの方が彼をつかんでしまつたのだ、そしていま



にもはふり出されようとしてゐるのが彼の眼にも見えてくるのである。これまでは中心を外にもち、中心の外に立つてゐた。中心の外に立つ離れた存在をひとびとは自由と讃美した。今度は審美的人間もおそらくは中心に立たされ、中心をもつにちがひない、しかしこの中心、この最も奥深い内部の中心は絶望なのである

(Rudolf Kassner, Sören Kierkegaard, Heidelberg 1949, S. 36f.)

現代文学の詩はもとより、戯曲や長篇小説や短篇小説の類ひなどでも、読者の率直な感想として、従来の文学に対する観念からすれば甚だ勝手の違つたもの、率読したあとの何とも取りつくしまのない莫たる読後感、なにひとつそのあとに鮮明な印象を残さないあきたらなさを告白されることがよくある。当の読者が素人にせよ専門の学者にせよ、兎に角この種の告白がきはめて正直な、むしろ大胆といつてよい率直さからの発言であることにわれわれはもつと注目してよいのではないか。文学が近代から現代へかけて批評性をおびてきてゐることは、これらの読者は百も承知してゐるのである。問題が批評といふやうなところにとどまつてゐるのであるなら、このやうな読者は決してひけをとるやうな読者ではない。かれらをしてかくも率直な発言に駆り立ててゐるものは批評といふやうな生やさしいものではない。どこまでも自由であつてよい、いや自由でなければならぬ批評ですら、肝心かなめのそこ・の・と・こ・ろ・ではびつたりと沈黙してしまはなければならぬやうな場所の彼方にかれらは何物かを認めてゐるのである。この認め方が意識的であるか、無意識的であるか、これの虜になつてしまへば、われわれの折角の注目も的を逸し、生産的でなくなつてしまふ。ここに近代審美主義の帰結する現代文学における比喩的性格の把へがたい問題があつたのであり、把へがたいこの問題の中心はまた同時に、現実の外に立つ離れた自由、すなはち自由の即自態が時間によつて対自的に媒介せられて現実の真只中に投げ出された、対自的・自由の中心でもあるのである。これは、しかし、抜け出すことのできぬ可能性の中心であり、虚無の中心である。虚無以前の段階では可能性すら可能ではなかつた。虚無に徹してはじめて可能性は真に可能性として可能となつたといはねばならぬ。しかしもはや脱却する能はざる可能性の中心が対自的・自由の中心なのであり、しかもこのもつとも奥深い内部の中心から対自的に、あらゆる方向へ無限に、自由の可能性を踏破してはじめて獲得せられ



ねばならない現実の自由の問題を審美的人間は自らに課するものといはねばならぬ。もはや超えることのできない可能性の中心に下り立つて、これを自らの運命の根源へ翻へすのである。審美的人間には、この根源にあこがれつつこれを脱却せんとするよりも、むしろ運命を脱却せんとしつつ却つて運命にあこがれるといふ運命の逆説において自由の問題が課せられてゐるのである。どこまでも逆説的に生き抜かれた逆説の運命の彼方に現実の自由は証され、あたらしき自由の現実が打建てられねばならなかったのである。リルケは『第八の哀歌』においてこのやうな運命の問題と取つくみ、『第九の哀歌』の現実肯定へと転ぜられた。人類大の規模において、むしろそのかかはるところは宇宙的規模においてはたして運命はその根源より、いかに克服せられたであらうか。しかしリルケはこれを、遂に説き明かしはしない。文学は人生の批評でありつつ、これを超えてゐる。むしろ、批評のをはるところに、文学ははじまる。文学は読者といふ歴史的社会的種の媒介にゆだねられつつ、歴史的運命の未来を先取してゐるのである。どこまでも逆説的な運命の逆説の彼方に文学の作品は置き据えられたのである。そしてこの逆説の彼方にあたらしき現実の自由があり、自由の現実が確立せられた。リルケは旧き現実の *Kunst-Werk* からこのあたらしき現実を区別して *Kunst-Ding* と呼ぶのである。ここにリルケ文学の近代的な意味における未聞のリアリティがあるのであるが、このリアリティを、さういふ何かリアルなものを表現するものとして、ラテン語に *res* といふ言葉がある。これはリアル (*real*) だとかリアリティ (*reality*) だとかいふ近代語のもとになる言葉であるが、元来、物とか、物と物との関係・事柄・事態、あるものごとにおける存在・運動といったものを指して、現実一般を言ひ表はしながら、ドイツ人が「現実」を *Wirklichkeit* と呼んで力動的な関係・力動的な振舞ひ・力動的な運動といった面にアクセントを置いてゐるのに対して、ラテン語の *res* ではむしろ、物とか事柄とか存在の方に重点がある。ところで、リアリティといふ近代語のもとになったラテン語の *res* に相当するドイツ語が *Ding* といふことになるが、これがリルケの文学のなかに入つてくると、またまったく違つ



たものになる。いはば、リルケの Ding のなかには、ラテン語の res という言葉のなかに堅固に、安らかに、あたかも自明のことのやうに守られてゐるやうなものが、そのやうな形では何ひとつのこつてゐない。そのやうなものではなくて、リルケによつて祈念せられ、もとめられたまつたく新しい現実存在に対する替名になつてゐる。詩人として成長してゆくにつれて次第にリルケの詩作の奥深い内面の負托のなかに取り入れられていつた、何かあたらしいたしかさをもつた現実存在のある様式をおもはせるイメージの、ひとつの具体化になつてゐるのである。リルケにはそれが何か必然的なものとしか感ぜられないやうな、さういふ在り方で存在するすべてのものをさして、リルケは Ding と呼ぼうとするのである。リルケの Ding には、この言葉で意味せられたものの存在様式が、ここにはじめていささかの濁りもなく表現せられてゐるとしか思はせないやうなところがある。リルケの文学をどんな風に読まうとする読者についていても、このことには変りはないのである。翻訳にせよ、原典にせよ、ごく初期の作品であらうが、晩年の『哀歌』・『ソネット』の詩境であらうが、とにかくリルケの文学がきほめておほくの読者をひきつけてゐる、この両者のあひだの關係のたしかさはこの辺に伏在してゐるのではないか。リルケの Ding は、そのままに肯定され、認められるやうな、眼前・触目の存在物を直かにさすのではない。あたらしくもとめられ、何か内面の必然性によつてあたらしく産み出されねばならなかつたものである。現に存在する物であつても、今日なほ倂をととめてゐるといふにすぎぬもの、そして一方ではどんどん失はれ、没落し、消滅しつつあるもの、生きてゐる現実の生命からは見すてられたかのやうに辛うじて現存を支へられてゐるもの、それがどんなに見事な文化の華とうたはれようと、リルケはこの様な過去の遺物にロマンティックな憧憬のこころをよせていたづらに旧套墨守したりする詩人ではなかつた。悲しい否定の運命にさらされながらしかもいつまでもいぢらしく愛すべき姿態をたたへてゐるこのやうな Ding にさへもわづかに残されてゐるたつたひとつの価値、そしてまつたくの没意味、没価値の時代にあつていかにも真に価値あるものにふさはしい謙虚な素朴さで詩人を待つてゐるかけがへのない唯一の価値といふのは、詩人のこころの内的深部で変容せられ、何の曇りもない



「純粹聯関」のなかへ、「癒された、幸福な、まつたき存在」のなかへ救はれる可能性をもつてゐる、といふ一点であり、また逆にこの一点が詩人の創造精神にとつてかけがへのない内面の負託となつたのである。すなはちリルケの *Ding* にあつては、ラテン的な *res* の即自的リアリテイは対自的に否定せられ、対自的自由に媒介せられて自己否定の内面の営み・作詩行為のうちにすでにまつたき存在の肯定へと救ひ出されてゐる。リルケの現実、いはゆるリアリテイなるものがラテンローマの世界感情におけるそれとどんなにへだたるものであるか、ローマ的現存在感情よりすれば、まつたく非現実だとしかまうせぬ世界であらう。この非現実がリルケの作品の現実にとどのやうにしてたかまつて行つたか (Cf. Hermann Kunisch, *Rainer Maria Rilke. Dasein und Dichtung*, Berlin 1944; de., *Rainer Maria Rilke und die Dinge*, Köln 1946; Romano Guardini, *Zu Rainer Maria Rilkes Deutung des Daseins*, Bern 1946, S. 19 ff.; Theodor Steinbüchel, *Mensch und Wirklichkeit in Philosophie und Dichtung des 20. Jahrhunderts*, Freiburg/Breisgau 1950.)

前前稿に引用した『第七の哀歌』の一行であるが

*Denn auch das Nächste ist weit für die Menschen.* (DE VII 65)

これをヘルダアリーン晩年の讃歌『パトモス』の冒頭と比べてみると、その背景をなす宗教的心情の特異な類似性を発見すると同時に、文学の *Stil* に現実となつた一世紀をへだてる時代感情、詩的言語形姿ににじみ出てゐる現実感覚の埋めつくすことのできない罅隙に、われわれは瞠目するのほかはない。ヘルダアリーンの『パトモス』の最初の草稿の冒頭の二行 [*Nah ist / Und schwer zu fassen der Gott.* (Große Stuttgarter Ausgabe, II, 1, S. 165.)] とリルケとを比べてみると、そこには、何か達成せられねばならないもの、成就せられねばならないものがあり、それがごく手近なものと、いとも容易なことであるかに見えて、その実、遠い困難なものであるといふ点において共通した面はある。しかもヘルダアリーンの詩句に徴してみると、リルケの場合に詩句にあらはれてゐないものが実は何を指してゐたのか、それさへも一応ほのめかしてみせてくれるのである。しかしリルケにとつて神は嘗てイタリアにゐたのであり、リルケがロシアで見た神は未来の神であつた。ロシア体験以後のリルケにあつては、神は芸術家の内部のいとなみによつて完成さ



るべき未来の神であつたのである。「ペシミストが神はゐたといひ、信仰者が神はゐるといふとき、芸術家は微笑を泛べて、神は来るであらう、といふ」といつたやうな言葉がすでに一八九八年頃のリルケの劇評やブックレヴィウに見られるのであるが、リルケはこの確信に対する確証を、ロシアの未来とも呼ばれよう現実のなかに見たのである。この確証を、このあかしを、この一回きりの神話を胚種として、リルケ文学は開花していつたといつてよい。作品が開花することによつて、作品の開花のなかに、詩人の内面の生も開花し、リルケの全作品は、詩人の内面の全生涯は、神を描いて神を語らぬ、ロシアの聖像画<sup>イコノン</sup>になつてゐたのである。沈黙と謙譲とをたたへてもはや歌はぬ歌、芸術ならぬ芸術、もはや物象としかいへない芸術<sup>＝物</sup> *Kunst-Ding* になつてゐたのである。リルケは『時禱詩集』以後、神を語ることが次第に稀になつてゆき、それにひきかへて、リルケの物象 *Ding* といふ言葉が具体的に成長してゆき、『哀歌』・『ソネット』の境地でリルケ文学のスタイルに完成せられたのであるが、リルケに神があるとするならば、このやうな未来の神、芸術家によつて完成せられねばならない未来の神があるばかりである。しかも初期の未来の神が、リルケ文学晩年の *Ding* に完全にすりかへられたといふこと、このことは決して完全なイークオールを意味してはゐない。このことはヘルダアリーの詩に徴してみれば明瞭なことである。リルケにあつては、内面のもの、内面の空間に裏返へされた世界——これをリルケは世界内面空間 *Weltinnenraum* と呼んでゐるが——このやうなまつたき、幸福な存在へ無常迅速に纏綿せられた物象が変容せられることによつて、何か失はれた神的なものがそこに、この変容のうちに顕現せられるのである。一方、晩年のヘルダアリーにあつては神はどこまでも「祖国の父」なのであり、「すべてを愛するもの」なのであり、そしてまた天使は「祖国の天使」なのである。リルケにあつては変容せられるのは外界の可視的に把へうる *Dinge* であり、それを変容するメデイウムとしての詩人のこころ自体が世界の座であり、変容せられた *Dinge* によつて、*Dinge* とともに、この内面空間は世界のあたらしい実体となる。これが *Weltinnenraum* と呼ばれるものである。ヘルダアリーの空間は地理的に、歴史的に、そして祖国とか故郷といふごとき発想方式で経験せられうるもの



に由来し、それが神話的な讃歌の世界に高められたものでありながら、しかもなほその神話的な空間には現実のゲルマニアとギリシアと、そしてアジアが現存してゐるのである。しかしリルケの「世界内面空間」、リルケの神話の国ともいつてよいこの *Weltinnenraum* は、生れ故郷のボヘミアや、詩人的開眼のこの郷ロシア、祖国ドイツや、また晩年の讃歌への詩人的完成にとつてかけがへのないものとなつた南仏プロヴァンスやイスパニア、そしてそれらの精神風土をそのままに置き移したやうなスプースのヴァレエの溪谷、かういつた彼の生涯の旅路を葛折につづる地理的な空間が神話の世界に高められたのではない。リルケの文学には、かういつた方式による現実の神話化といふことは存在しなかつたといつてよい。『第十の哀歌』に展開せられるあの神話的な精神風景も、リルケが一九一〇年十一月の中旬から翌年の三月二十九日にわたつて旅行したエジプトの精神風土をおもはせるところがあること、一見して自明の理のごとくであるが、これは決して神話の故郷に高められた現実といふふうなものではない。「すでに死の国に住みついた年増の嘆きの女 *«Klage»* が新参の若い青年の死者をつれて嘆きの国 *«Klageland»* を案内してまはるのであるが、これはエジプトとおなじだと考へてはならぬ。さうではなくて、いはばあの砂漠のやうに澄みきつた死者の意識に映るナイルの国の翳にほかならぬ (An Hulewicz, 13. 11. 25) と後年リルケは記してゐる。リルケは生涯この郷の故郷を、「ロシア」をもとめて遂にそれを外界には見出だすことはできなかつた。外界がここの郷を拒めば拒むほど、われわれの眼に見えないリルケの内部で、ここの郷は次第に成長し、築き上げられていつた。ヘルダアリーンは *«Gesang des Deutschen»* において祖国ドイツを「もろ国びとの聖なる心 *«O heilig Herz der Völker, o Vaterland!»* (ib. S. 3)」と歌つたが、リルケにとつては地上のいかなる国も、「もろ国びとの聖なる心」ではありえなかつた。ここの郷はリルケにとつて、芸術的創造の秘奥をつつむ理想界でなければならなかつた。

さらに、前掲の讃歌『パトモス』の初稿をもととしてヘルダアリーンが清書しようとしたものが断片のままになつてしまつた、後の *Fassung* [Voll Güt ist. Keiner aber fasset / Allein Gott. (ib. S. 173)] を照合すると一層明瞭になつ



てくるのであるが、神は「慈愛に満ちた」一箇の Person であり、そのやうな神の経験が人間意識のぎりぎりの限界までおしすすめられてゐる。しかしリルケの場合には神は愛の方向そのものにすぎず、Person としての愛の対象ではない。このことは前稿及び前稿において詳説したところであるが、リルケの顔と神の顔とはおなじ方向をむいて、おなじ方向にひとつに重り、ひとつたりと一枚にならうとする。リルケにとつては神的なるものの知覚が、超越においてではなくて、世界空間、世界内面空間の内部でおこなはれようとするのである。リルケは、ガールディーニの説くごとくに (Guardini, ib.)、啓示の神話的根源を掘りかへし、むしろこれを犠牲にして、却つてその内実を世界の内部へとり込んだのである。リルケは『第八の哀歌』において、この世界の立場から、神の創造にかかはる被造物としての動物を、創造の日の天国の自由をなほうしなはぬ純粹な実存として歌ひあげたのである。これはもはや聖書の神話ではない。といつてまた、たんなる近代的自然主義でもない。われわれは小径を歩いてゆく、おそらくは静かな壮嚴さのなかにたたずまふ森の小径を。そこへ、どこからか一匹の動物がわれわれの前に現はれる。不思議な動物、いやむしろ「動物」そのものである。鹿であらうか、麋であらうか、一角獣であらうか、『ソネット』第二部の第四番はこの秘密を証してゐる。

O DIESES ist das Tier, das es nicht gibt.

Sie wußtens nicht und habens jeden Falls

— sein Wandeln, seine Haltung, seinen Hals,

bis in des stillen Blickes Licht — geliebt.

Zwar war es nicht. Doch weil sie's liebten, ward

ein reines Tier. Sie ließen immer Raum.

zu sein. Sie nährten es mit keinem Korn,

nur immer mit der Möglichkeit, es sei.

Und die gab solche Stärke an das Tier,

daß es aus sich ein Stirnhorn trieb. Ein Horn.



Und in dem Raume, klar und ausgespart,

erhob es leicht sein Haupt und brauchte kaum

Zu einer Jungfrau kam es weiß herbei —

und war im Silber-Spiegel und in ihr. (Sao II 4)

（おお何といふことであらう何処にも存在しない動物「一角獣は古くから、ことに中世ではしばしば称讃の的となつた処女の動物であるこの一角獣は、姿を現はしたならばすぐさま処女の手によつて翳された銀の鏡に（十五世紀のゴブランの壁掛を参照のこと）、そして同時に、銀の鏡と同様に純潔であり、同様に秘められた第二の鏡である処女のところに映されねばならぬ、といはれてきた。——リルケが」だとは。このやうな動物はたれもしらなかつた。かれらはしらないままにとにかくその徘徊を、その姿態を、あの頸を、そしてしづかな眼ざしの奥にひそむ光までも——愛してきたのだ。

たしかに嘗て存在したといふ確証はない。しかしひとびとがそれを愛したゆゑにこそ、どこからか、それは純粹無垢の動物となつて生れてきたのだ。このやうな未聞の誕生を迎へることのできる空間を、かれらはいつも用意してゐた。淨らかにはききよめられた、そして主を待つてゐた部屋に生れたばかりの動物は、かるがろと頭をもたげるではないか。この段となつて何の詮議だてを必要としよう、とにかく

存在するのだ。ひとびとはこの動物を育てるために一粒の穀物もあたへはしなかつた。ほかならぬ、きつと存在するといふ、眼に見えないこの可能性をたへず信じ、この可能性にどこまでも切ない愛をそぐことによつて、ひとびとの幾世代にもわたるこころの奥底深く育てられてきたのだ。存在の可能性といふはかない、しかし切ない飼葉によつて、眼に見えない逞しさと力をたくはへてきたこの動物は

額に一つ角をつけるまでに成長してしまつた。角をつけたのではない。いふならば、藪から棒に、いきなり一本の角が飛び出したのだ。きつと存在するといふ切ない可能性から突然現実が、存在が、一つの角が飛び出してきたのだ。一角獣といふ可能性の動物はもはや、動物の可能性を超えて、一つの角といふ現実、一つの角といふ存在——とりもなほさず（一角獣といふ）動物そのもの——となつたのである。この一つの角といふ存在はきよらかな純白の姿態をひとりの処女の裾元にはこんでいつた。するとその純白は処女のさきさげる銀の鏡に映り、秘めやかな、澄みきつたこころの鏡に



うつり、処女のなかに、処女とびつたり、一つになつて存在してゐた。

動物そのものといはねばならぬ一角獣の存在は可能性の根源よりする克服としての存在なのである。この可能性にただひとすぢの切ない愛がそがれてゐた。可能性の彼方にこの愛は対象をもとめはしなかつた。対象をもとめぬ愛の方向はびつたりと神と一枚になり、まだ知らぬ対象を、却つて無限に知つてゐたといはねばならぬ。可能性の根源に降り住む愛の眞実が可能性すらも現実に、存在に高めたのである。これは現実の神話化といふよりも神話の現実化である。ヘルダア・リーンの祖国の神話化に対してリルケには神話の世界化がある。世界化せられ現実化せられたリルケの神話の世界をカスナアは父の世界と呼んだのであるが、これは神話的に超越化せられたいはゆる父の世界をいふのではなく、どこまでもそのままの現実を、世界を、内部に裏返した内面空間なのであり、その限りにおける意味において、世界の内部に取り入れられた神話の世界、父の世界なのである。この世界内面空間と可視的外的世界空間との間の隔壁が、実は内部からはすけて開けて見えるのであり、これが『第八の哀歌』の主題たる「開放空間 *das Offene*」であつて、世界内面空間の内部から、この開放空間の方向に向つて神的なるものは知覚せられねばならぬ。まつたくあたらしい現実を可能性の彼方にもとめねばならなかつたリルケは、どうしても外から包摂するやうな超越的な神でなく、内在的に何処かでささへてゐるやうな神秘主義的ないし汎神論的な神でもなく、実現の世界空間を眞に世界空間として一つにむすび、世界を世界として意味あらしめるやうな神的なものを世界そのもののなかに認めねばならなかつたのである。リルケは一九二一年、ボオドレール生誕百年に当る日から六日目の四月十四日、アニータ・フォラアにささげたインゼル版の『悪の華』に、『ボオドレール』と題する頌詩を書きつけてゐる。

「ひとびとのこころのなかに碎けて遠くとび散つた世界を、詩人のみ、ただひとり一つに集めた。詩人は美を未聞の美しさに輝かしめた。しかし詩人は詩人を苦しめるものさへも讃えてやまず、限りなき廃虚のあとをくまなく歌ひきよめた。そして今や破壊の根源すら、世界とならねばならぬ時がきたのだ」(Rilke, *Gedichte 1906 bis*)。このやうなリルケ



の世界には、我と汝との、いはゆる Person の対立はないのである。したがつてカスナアもいつてゐるやうに、リルケの文学には普通いはれるやうな意味での Person としての罪の意識はない。Person の対立なき空間の世界にはいはゆる運命もない。しかしリルケの世界は絶対に空間の世界であり、絶対に罪の意識なき、絶対に運命なき世界であつたであらうか。カタリーナ キッペンベルクがリルケの言葉として『リルケ論』のなかに記した「運命をもたぬことが僕の運命です」といふ一句は含蓄の深い言葉である。運命をもたぬ運命をもつといふこと、それは persönlich な運命の対立を超えて運命の根源につくといふことである。しかし運命の対立を超えて運命の根源につくことによつて、はたして運命そのものを超えることができるであらうか。運命の根源も、また運命でなければならぬ。

運命の根源も、また運命であるといふ意味において、リルケ運命觀の自書たるべき『第八の哀歌』、ひいては『哀歌』全篇は「運命の書 Schicksalsbuch」となつたといはねばならない。弁護や弁解は抜きにして、この一線は率直に認めねばならぬのではないか。そしてその上で、文学者も哲学者も、そして神学者も虚心坦懐に対決すべき問題なのではないか。persönlich な対象をもたない純粹行為としての愛であるが、それは同時に他者において成就せられる。愛が成就せられることにおいて他者は愛の至高なる意味をさづかる。果された愛の他者は自由に果された愛の内的行為において復活する。もはや愛の他者自身としてではなく、この愛の他者において可能となり、そして完成せられた愛することの自由そのものとして復活するのである。この自由の悦びを詩人は美として歌う。愛は我に対しても、汝に対しても同様に無我の愛となり、もはや自他双方にとつて、対象意識に纏綿せられる「対立」としての愛でなく、開放空間のなかへ実現せられる愛の行為の自由として存在したといふべきである。人格的なものは単に眼前する対象、うち眺められ手にとつてみることできる物的なるものでなく、我と汝と關係の冒險がおかされてはじめて顕現される事態である点において事物的なものと區別せられねばならぬものであるが、この人格的なものが徹底的にぎりぎりの極致までおしすすめられて思惟せられるならば、人格は自己に内在する個人的現實を何ひとつ残さずにすつかり消滅せしめて、被造



物全体の放射運動の発出点、自由に転ぜられた有限生命活動の質方向、存在の自由への門にまで高められるであらう。従つて他の人間に対する愛はより偉大なる愛、即ち神に対する愛の前提なのであり、神に対する愛において実現せられるべき秘密を準備するものといふべきである。『第八の哀歌』では、被造物は対象意識から開放せられ、従つて死から自由であり、その歩行は泉の行くかごとく、開放空間の中へ永遠のなかへ入つてゆき、その眼前には神があるばかりであるが、「マルテ」の神は完全に果された愛の方向にすぎず、愛の対象ではなかつた。この二つの考へ方が、神が世界に取り入れられたといふこととぴつたり符合してくるのである。神はもはや自己の内部で、内在的な現実にとどまつてゐない。神はもはや超越的な神自体でもなければ、創造者でも主でもない。『哀歌』の神はすべての物象のたんなる補語 *Komplement* にすぎぬ。空間を区切る限界の片側にあるもの、そして被造物の運動が進む方向にあるもの、すなはち開放空間にほかならない。有限者が他者から、それがたとひ絶対者であらうとも、およそいかなる他者からも解放せられて、まづたくの有限性のなかに、支へられずしてしかも安らひ、やすらいでしかもたえず揺れてゐるとき、同時に、そしてまさに、さうあつてこそ、あのかがかしい自由・失はれた意味のあの燦然たる顕現・あのいやされた見事な存在が成就するのである。第二の『マルテ』の立場からこれを見るならば、神はまさしくこの有限なる者の最も高貴なる行為としての愛の「方向」である。愛の行為の対象でなく、愛の行為の主体の究極の汝でもなく、愛がもはや誰かをでなしに、愛すること、ただそのまゝを決意するとき、愛することにおいてもはや依存的でなく創造的であり、もはや他動的でなく放射的であらうと決意するや否や、愛そのものにおいて顕現せられるあの質なのである。ニーチェは『ツァラトゥストラ』で、「魂は、肉体における何物か」である (Erster Teil, Von den Verächtern des Leibes.) といつて魂を肉体における最後の生氣であり調和であるとしたが、これに倣つて云ふならば、『哀歌』の教ふる神は「世界における何物か」であるといへよう。世界が最後の完成にもたらされるとき、世界それ自体において突然に啓かれる自由であり、精神のはたらきである。古き汎神論が主張したやうに、世界が無限に絶対化せられることによつてではなく、まさに世界の有限性のゆゑにであり、そ



の有限性において世界の有限性はその極度の強度と意味の確かさとそして美を獲得するのである。Pantheismusといふよりも未聞の新しい精神の次元に結ばれた Pan-en-theismus ともいへようか。『ドゥイノの哀歌』をかいいて恰度一年たつた頃、リルケは書柬に次のやうに記めてゐる。「最近の私の作品をあなたはお読みになつて、私が神の名をほとんど口にしてゐないことにお気づきでせう。神と私との間には明状しがたい秘密の申合せがあるのです。嘗て親近があり、浸透があつたところに、現在ではまつたくあたらしい距離が張りつめてゐるのです。あたかも近代科学が微視的な思考法において原子を一つの宇宙と解してゐるやうに。捉へることのできるものは逃れ去り変転します。所有の代りに関係をひとびとは身につけはじめたのです。そして、完璧であるために、言訳をしないために、次第に一種の無名性が支配的になつてきました。この無名性はもう一度神のもとへ立ちかへつて出なほさなければならぬのです。壮大な感情の体験は後退し、その後に、何んな隠微なものをもかぎわけようとするあたらしい感覚の限らない慾求がひたひたと湧いてきました。豊かな神の属性は、もはや語ることでなくなつた神のもとから剝奪され、舞ひ戻つてきて、神の被造物の、愛と死とのものとなつたのです。おそらくは時禱詩集のいくつかの詩ですでに証されてゐることが、ただいく度もくりかへされてゐるにちがひありません。天もかきくもらんばかりに深々と吐息する心からの神の昇天と、雨となつておりてくる神の降下と。しかし何のやうな形においてにせよ、そもそもそれを告白するといふこと、これすでに過ぎたることといふべきであります。……罪はきつと神への驚くべき廻り道であります。……天使たちはみんな大地を讃へながら大地へ舞ひ下りようとしてゐるのです！ (An Ilse Jahr, 24. 2. 23.)」ここに表明せられてゐることは全体として、以前のリルケの暗いところにある深部の神に対する宗教感情を深めたものにすぎない、本質的に言つて、一步もこれを進展せしめたものでないやうに見える。しかし「距離」といふことばと「無名性」といふことばには神の「暗さ」の深化以上のものがある。しかもこの「以上」は「所有の代りに関係を身につける」といふ言葉で明言せられてゐるのである。